

日本体育・スポーツ・健康学会

体育哲学専門領域

会報

Vol.25(4), February, 2022

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 定例研究会案内
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号予告！

巻頭言

体育に関わる「問い」の設定と継続

杉山英人（千葉大学）

40年程前の卒業論文で「体育はどのような教育領域なのか」という素朴な問いを持ち、それをより専門的に考えるため修士課程では体育科教育を専攻した。当時それまでの伝統的な体育の考え方に対する新たな方向性として education in movement 論が紹介され、その理論的根拠として教育哲学者の R. S. Peters の教育論、特に education as initiation が示唆されていた。そこで修士論文では代表的な education in movement 論の内容を明確化した上で、ピーターズの教育論の検討を通してその理論的根拠としての正当性、従って、education in movement 論それ自体の妥当性を批判的に検討した。言うまでもなく体育を論ずる前提として教育の理論枠組みの理解が求められるが、体育の独自性が強調される場合、特にそれが体育の正当化として提示される場合この点の注意が必要となる。つまり、その独自性が教育においてどのように機能するのかが問われるということである。この意味で体育論は教育論として提示されるべきものであるが、後者から前者への言及は通常なされない。体育研究と教育研究の関係もこのことを示唆しており、体育の独自性も体育研究も教育という枠組みというよりもそれ独自の枠組みの中に閉じられている傾向がある。

その後、教育史上「知育・徳育・体育論」で知られる H. スペンサーの教育論を研究対象としたのは、近代以降の教育の基本枠組みである「知・徳・体の論理」を考察することが教育の一領域として制度化されている体育の基本的論理構造の明確化につながると考えたことによる。なお、スペンサーにおける「知・徳・体」という人間把握の三契機は、「bodily / physical, moral, intellectual」として提示され、『教育論』第1章のタイトルである「どのような知識が最も価値があるのか？」に対する回答としての「科学 (Science)」の中で最も重要とされる「生命科学」の内容も「physical, mental, social」であり、まず「身体」が取りあげられていることから、「体・徳・知の論理」と言えるかもしれない。これら三契機は個別の独立したものではなく、「調和 (equilibrium)」の論理として機能することで内的行為規範が確立されることが前提となっていることから、それぞれに特有な「能力 (faculties)」の育成も本来個別的なものではありえない。そのため「身体の育成」においてどのような「能力」を育成するのかとともに、その過程で知性・徳性（感性）がどのように発揮されるのかということが重要となる。このことは、身体は必然的に文化的・社会的・歴史的文脈において育成され、躰、学校教育等の当該生活世界での日常生活を通して無意識の文化性（倫理性・美意識）が内面化し、それぞれの「生のスタイル」が確立されるということにも関わる。

このようなことから当初の問いは、「体育においてどのような身体を育成するのか？／しているのか？」という問いとして再提起され、体育制度外からの教育における身体の捉え直し、あるいは身体を基点とした教育の再構築の試み（「学びの身体技法」「わざ」から知る）

「知の身体性」「模倣と習熟」等), 即ち「教育における身体性」という論点の重要性を喚起するものとなった. この意味で「身体」の教育は制度化された体育の枠組みを超えた新たな教育の可能性を有すると同時に, 現行の体育制度の再構築を求めるものでもあり, その一例として「身体感性論」がある. なお「身体の育成」に関しては, 基本的には身体感覚の洗練化を通じた自分の身体状況の的確な把握とその調整のための具体的技法の習得(身体的教養の獲得)がその中心となる. そのための身体技法論及び実践技術(身体技術)体系の構築が必要であるが, その実践は倫理性・美意識の身体化という文化実践でもあるとの認識が重要となる. このことは, 体育における身体及びその育成のための内容・方法論を根本的に問い直す契機となり, 体育制度内からの新たな身体の教育の可能性を提示するものとなる. 体育に関わる素朴な問いの継続は新たな実践的体育論の模索の過程となっている.

杉山英人 (hidetohsk@faculty.chiba-u.jp)

体育哲学考

私の些細な「体育哲学考」

三浦 健 (鹿屋体育大学)

私は, 1980年代後半の筑波大学体育専門学群3年生から大学院修士課程2年生までの4年間, 体育原理ゼミでお世話になりました. ここでは, 修士論文指導教員の片岡暁夫先生, 副査をご担当いただいた佐藤臣彦先生, 卒業論文指導教員の近藤良享先生から, 劣等生であった私に対して貴重で温かいご指導をいただき, 卒業, 修了へと導いていただきました. また, 体育・スポーツ政策論がご専門の田崎健太郎先生からは, 修士論文制作へ向けての貴重な資料をいただきました. 同時に, 当時のゼミ生で現在体育哲学専門領域において中心的な立場でご活躍されている諸先輩方からは, 能力もないのにバスケットボール活動ばかりしていた“異端児”に対し, 説教することもなく温かく接して(時には遊んで)いただいた上に, 論文制作時には的確なアドバイスもいただきました. 皆様には感謝の気持ちでいっぱいです.

その後, 私は鹿屋体育大学へ実技系の教員として着任し, 間もなく勤続30年を迎えます. この間, 主に体育方法学領域での研究活動を行い, 体育哲学領域の研究活動は一切行っておりませんが, 学生時代にお世話になった方々一同とお会いできる日本体育学会では, ほぼ毎年OB会に出席して宴席を楽しませていただいております(コロナ禍で皆様にお会いできないのが残念です). また, 2018年(平成30年)8月24日~26日に, 私の出身地である徳島市で開催された日本体育学会第69回大会(徳島大学)では, OB会(1次会&2次会)の会場設定を担当させていただいたことを思い出します. 極めつけとして, 2011年(平成23年)9月25日~27日に鹿屋体育大学で開催された日本体育学会第62回大会では, 体育哲学領域一般研究発表の会場運営責任者(OB会場設定も)を担当させていただきました.

さて, この度このような私が体育哲学専門領域から「体育哲学考」というお題をいただき, 会報に寄稿するなんてことは全く考えたこともありませんでしたし, 私の学生生活をご存じの方々からは馬鹿にされるのではないかと思います. しかしながら, 曲がりなりにも体育哲学と出会って30年を超える年月を経て, 私が体育哲学に絡めて考えていることはないのか? と改めて振り返ってみたところ, 些細なことではありますが該当する事例がありましたので, 述べさせていただきます.

私は, 現在2009年3月に創刊された「実践活動に直接寄与する知見を提供する」論文を掲載していくweb ジャーナル【スポーツパフォーマンス研究】を運営する日本スポーツパフォーマンス学会事務局, 及び編集委員を担当しています. 昨年, 「実践現場に向けた雑誌を目指して」という特集での執筆を依頼され, <私が取り組んできた実践研究論文についての整理>というタイトルでEditorial(論説)を掲載しました(三浦, 2021). この中で, 私がこれまで取り組んできた(論文掲載された)実践研究の特徴について, 「2つの研究手法」(①課題解決型&②振り返り型)×「2つの検証方法」(A実践型(測定実験型)&B実戦型(実戦検証型))=4つの分類を行い, 区分ごとに私の掲載論文の概要を紹介しつつ論述しました. 今思うと, この分析手法は学生時代に学んだ「カテゴリー装置」(佐藤, 1993)を援用したもの

に他なりません（拙文をご一読いただき、お会いした際にご批判いただきますようお願いいたします）。

今回の寄稿により、このような私が、「体育哲学考」していたのだと認識することができました。改めて、体育哲学は私が研究者の端くれとして活動できている一助となっているのだと痛感しました。

最後に、コロナが終息し、皆様と酒を酌み交わせる世の中へと戻ることを祈念し、筆を置きます。

文献

- ・三浦 健（2021）私に取り組んできた実践研究論文についての整理. スポーツパフォーマンス研究. Editorial 2021 : 16-22. http://sportsperformance.jp/editorial2021/editorial2021_miura.pdf
- ・佐藤臣彦（1993）身体教育を哲学する 一体育哲学叙説一. 北樹出版：東京，pp. 29-36.
（三浦 健 k-miura@nifs-k.ac.jp）

書籍紹介

藤垣裕子・柳川範之『東大教授が考えるあたらしい教養』（幻冬舎、
2019年5月） 千葉洋平（岐阜薬科大学）

私は、2020年度に現在の大学に着任し、教養の体育の授業（講義・実技）を担当しています。それまでは、スポーツ科学部の教員をしていたことから、改めて教養について勉強し直す必要があると考え、今回紹介させて頂く本に出会うこととなりました。またこの教養という概念は、私がかここ数年研究として取り組んでいるシティズンシップとの繋がりが深いものであり、そうした意味でも私に影響を与えてくれた本です。

あたらしい教養とは

教養の概念としてよく取り上げられるものとしては、リベラルアーツやビルドゥング、あるいは日本学術会議等が示すものがあります。そこでは教養を、単なる知識だけでなく、規範意識や感性、あるいは行動力や体力等を含めた幅広いものと捉え、それが偏った認識からの解放や社会課題の解決力に繋がっていくとされています。しかしながら我が国では、海外の知識の収集によって発展してきた歴史的経緯により「教養＝知識量」と捉えられる傾向があります。

けれども、現在の我が国は、世界で少子高齢化が最も深刻な国となり、いわば課題先進国として新たな解決策を逆に世界へ提示する立場となりました。そこで著者は、教養の本質を「自分とは考え方が異なる人と建設的に議論できる力」（p.38）とし、異分野や異なる意見を持つ人同士で、建設的に議論をし、思考や社会の在り方を発展させていける力を、新しい教養と捉え直すことを主張しています。

日本の無教養

この本の中で、我が国の教養の問題に関する事例として挙げているのが、福島第一原子力発電所での事故です。この問題の背景には、地震、津波、原子力の「研究者間」の連携、そして「研究者と行政」との連携の不足があったとされ、日本の教養のなさを露呈するものとして説明されています。

確かに学生の生活を見ても、部活動での繋がりがばかりに偏っていたり、気心の知れない学生とは授業の中で上手く関係が築けなかったりといったことが見受けられます。本書では、専門家が、一般の人々や専門の異なる人々へ、自らの知識を上手く伝え、連携していく力を持つことの必要性が述べられています。

今後スポーツ文化の質をより高めていくためには、体育・スポーツの専門家や学生が『スポーツは得意ではない』や『スポーツは好きではない』といった人々の背景や文脈を理解したり、他分野におけるスポーツの意義や役割を認識したりしていける力を身に付けて行くこ

とが求められます。実際、私が今取り組んでいる総合型地域スポーツクラブの研究においても、市民、行政、あるいは学校間での連携の難しさがネックになっていることを確認しています。

また私自身も、学生との関わりが、大学や社会のルールを守らせることへの働きかけばかりになり、学生と新しいルールの在り方を議論したり、作り直したりといったことはあまりできていないことに気付かされました。ルールを作る習慣を身に付けることよりも、一つ次元の低いルールを守らせることに止まった関わりしかできていなかったのだと反省しています。

教養の下地としての体育の実技

こうした状況を踏まえ、実技の授業では、学生間で作戦を立てたり、練習メニューを作成したりといった議論の要素を入れていますが、実はそこに迷いがあります。

このようなことよりも、ゲームの時間を十分に取ってスポーツの楽しさを味わったり、多少のマナーの悪さも目をつぶり解放的な雰囲気にしたりしてあげることで、自然と学生間の雰囲気がほぐれ会話が生まれ、友達付き合いに発展していくことがあります。学生からは“ユルイ”授業と見做されますが、議論や連携といった下地としての役割を期待すれば、こうした実技の方が適しているのではないかと感じています（2つの要素を両立できないことの言い訳かもしれませんが…）。これからもこの教養について自分自身深めて行きたいと考えております。

千葉洋平 (chiba-yo@gifu-pu.ac.jp)

私の研究

競技スポーツを通じた人間理解

水島徳彦（東海大学大学院）

2021年の年の瀬、一件の依頼メールが届いた。それは、本会報の「私の研究」への寄稿依頼であった。これは、私にとって大変な仕事である。なぜなら、私は、体育哲学専門領域に身を置いて3年目の駆け出しの身であり、さらに自身の研究に日々もがいているという状態であるためだ。それゆえ、「私の研究と自信をもって語れるほどのものがあるのだろうか…」などと考えながらも、本会の皆様に、自身の研究におぼろげながら映し出されようとしている問題意識について聞いていただける好機であると思い至り、本稿の執筆を決意した。読者の皆様には、駆け出しの研究者の内なるものについて、お付き合いいただければ幸いである。

私の研究課題は、大雑把に言えば「スポーツ倫理」に関するものである。なぜ、スポーツ倫理なのか。このことを語るには、少々私自身の経緯について触れなくてはならない。遡ること11年前、愛知県の田舎から一浪して上京して後、大学生の私はテニスコーチとしてアルバイトを始めた。人と関わる仕事の魅力や、スポーツを通じて人々に幸せを感じてもらえることの楽しさに魅了された。その後、卒業研究に取り組むことになるが、その方向性は自然と決まった。それは、ジュニア指導（未就学児～高校生）場面において、「フェア」の大切さや、テニスがいくら上手くても人間性が大切であることを指導していた自身の姿勢に、ふと疑念が生じたためである。

私は、中学から硬式テニスを始め、選手として高校卒業まで競技に没頭した。その頃の経験を振り返ってみると、お世辞にも人格的に優れた選手とは言えなかった。試合中に感情的になったり、最も酷いとラケットを投げるなど…テニス選手的に言えばあるあるなのかもしれないが、道徳的に正しいことをしていないことは当時の私も心得ていた。私の内に当為への意識は残されているにも拘わらず、そのような振る舞いをしてしまうのである。そのような私が、子どもたちに道徳や倫理を説いているこの現実（なんと浅薄なことか！）から、なぜ競技スポーツに参加する人々は道徳意識から容易に逸脱してしまうのか、という点に関心が向いたのである。

このような傾向は、私のような目立った成績を残していない選手に限ったことではないよ

うだ. 2022年1月現在, グランドスラムタイトルを20タイトル獲得しているR. ナダル選手は「スポーツで成功した人たちと僕が共通しているのは, 大変な負けず嫌いである点だ. …中略…, とにかく何においても負けたら癩癩を起していた. 今でもそうだ.」(『ラファエル・ナダル自伝』より), と述べている. 普段はおとなしい性格であるにも拘わらず, そのようになってしまうとナダル選手は述懐しており, なぜそうなるのか分からないという.

競技スポーツでは, 勝利を得た際の快感は大きいものである. そのような競技スポーツを行う人間は, なぜ感情を乱し, 勝利に憑かれてしまうのか. このなぜを明らかにしてみたいというのが, 私の研究の一つのテーマである. 一方, 私の経験にもあるように, 道徳的に正しくないと分かっているにも拘わらず, すなわち当為への意識が残されているのに, 容易に非道徳的な行為へと傾いてしまう魔力が競技スポーツにはある. I. カントは, このような傾向を義務に従って嫌々ながら斥けるところに道徳性が存在するという. 私の研究では, この「嫌々の ungerne 念」という概念が, もう一つのテーマとなっている.

競技スポーツを行う人々は, なぜそのような傾向をもつようになるのか. それは競技という構造によるのか, それとも人間が根源的に具える傾向なのか. ナダル選手が, なぜそうなるのか分からないと述べる事態について, なぜを解き明かしたいというのが, 私の研究の方向性であり課題である. 換言すれば, それは競技スポーツを通じた人間理解である. 決して優秀な選手ではなかった私の視点から, 競技スポーツに参加する様々な人を見つめつつ, この問いに答えていきたい.

水島徳彦 (m.benta1018@gmail.com)

定例研究会

2021年度 日本体育・スポーツ・健康学会

体育哲学専門領域 第2回定例研究会 (案内)

森田 啓 (大阪体育大学)

日程: 2022年3月5日 (土) 15:10~18:05

オンライン(ZOOM)による開催

注意事項: 閲覧情報はメールリストで配信します. メールリストへの登録をお願いします. 会員以外が閲覧する場合は, 会員から研究担当にご連絡ください. また参加者は当日実施する出席調査 (Google Forms) に記入をお願いします.

【プログラム】

15:10 代表挨拶 関根 正美 (日本体育大学)

座長: 高橋 徹 (岡山大学)

15:15 研究発表① 白井 涼太 (日本福祉大学スポーツ科学部)
運動部活動を原因とした自死の現状とその対策

座長: 森田 啓 (大阪体育大学)

15:35 研究発表② 佐藤 冬果 (東京家政学院大学)
Self-authorshipの育成に向けた野外運動を教材とした
大学体育に関する研究

16:20 休憩

座長: 坂本 拓弥 (筑波大学)

16:30 研究発表③ 奥平 龍之介 (筑波大学大学院)

体育授業において雰囲気を感じ取る児童の身体：
かかわりの捉え直しに向けて

座長：関根 正美（日本体育大学）

17：15 研究発表④

Jun-Hyun Kim

(Graduate School of Sport Science Nippon Sport Science University)

An epistemological transition from competition against others to victory, defeat, and excellence in competition against oneself

18：00 体育学会案内

副代表挨拶 深澤 浩洋（筑波大学）

【問い合わせ先：体育哲学専門領域 研究担当】

森田 啓 hirakumorita@ouhs.ac.jp

高橋 徹 t.takahashi@okayama-u.ac.jp

【発表者氏名，タイトル，概要】

白井 涼太（日本福祉大学スポーツ科学部）

運動部活動を原因とした自死の現状とその対策

【概要】

日本では 2012 年に生じた桜宮高校の体罰事案を筆頭に，運動部活動での指導者からの体罰によって自死を選択する子どもが少なくない。また，運動部活動では生徒間のいじめやスポーツ推薦の問題等が山積している。本研究では，運動部活動が一つの原因として生じた自死について過去の具体的な事例を精査し，問題事象が起こる背景及び現行制度の問題点を明らかにした上で，その対策を筆者なりに導くことを試みた。当該問題から，運動部活動が存続することの意味やスポーツは社会においてどのような存在であるべきなのかについて考えていく。

佐藤 冬果（東京家政学院大学）

Self-authorship の育成に向けた野外運動を教材とした大学体育に関する研究

【概要】

本研究は，21 世紀型の大学教育において育成すべき能力として注目が高まる Self-authorship（以下，SA）に着目し，大学体育における SA 育成のための知見を得ることを目的に実施した。

研究Ⅰでは，国内外の文献から SA の理論的背景を整理し，SA 評価尺度を作成した。研究Ⅱでは SA 育成に向けた授業モデルを作成し，野外運動授業において実践したうえで，その効果を定量的に明らかにした。研究Ⅲでは，受講生の SA 発達に影響を及ぼす要因とその発達プロセスを定性的に明らかにした。以上の研究から，大学体育による SA 育成の可能性が示された。

奥平 龍之介（筑波大学大学院）

体育授業において雰囲気を感じ取る児童の身体：かかわりの捉え直しに向けて

【概要】

本修士論文の目的は，体育授業における児童のかかわりが何によって成り立っているのかを明らかにすることである。児童のかかわりに関する先行研究は，主体である児童に着目してきたた

め、彼らに影響を与える雰囲気については論じられてこなかった。そのため、シュミッツの議論に基づいて、体育授業における雰囲気がどのような性質を有しており、児童のかかわりにどのような影響を与えているのかについて検討する。

Jun-Hyun Kim (Graduate School of Sport Science Nippon Sport Science University)

An epistemological transition from competition against others to victory, defeat, and excellence in competition against oneself

【Abstract】

This research is based on the prevailing ethical problems that threaten modern sports such as doping, violence, buying referees and players, and match fixing. This research identifies the existence of victory and defeat in competition against oneself and the existence of excellence that everybody including losers can achieve. Through these existences, the purpose of this research is to show the new epistemological transition of victory, defeat and excellence in competition of sports.

事務局より

田井健太郎（群馬大学）

○ 2022 年度学会大会について
来年度の学会大会（順天堂大学さくらキャンパス：8月31日～9月2日）につきまして、詳細は3月の学会理事会で決定予定となっております。

○ 住所等変更及びメーリングリストについて
異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会事務局（<https://taiikugakkai.or.jp/admission>）にご連絡ください。会員情報は専門領域の名簿と連動しております。また、専門領域メーリングリスト（talk@pdpe.jp）に登録いただきますと、電子メールによって会報が配信されます。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。こちらに関しては、事務局（bureau@pdpe.jp）までご一報ください。

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下されます方は、広報担当：釜崎（kamasaki@meiji.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門領域会報第25巻第4号

発行者 日本体育・スポーツ・健康学会

体育哲学専門領域

関根正美（代表）

編集者 田中 愛, 石垣 健二, 釜崎太（広報担当）

発行日 令和4年2月3日

連絡先 〒371-8510

群馬県前橋市荒牧町4丁目2番地

群馬大学共同教育学部 田井健太郎 気付

電話：027-220-7326

【編集後記】

本会報ご執筆に協力いただきました皆さま、誠に有り難うございました。

もううんざりの第6波何某の話はよそうと思いつつも、この卒論・受験シーズンによくまあ本当に混乱させてくれるものだと呆れるほかありません。

そんなことより、また第2回定例研究会の案内には、春をむかえる間近の斬新な卒修論の発表タイトルが並んでいます。どうか会員の皆さまにとっても、春をむかえる前の根強くたくましい力が蓄えられる時季となりますよう。春からの憂さ晴らしに期待しつつ。(I)